

# 永遠神劍「永全」

CHAOS (1)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

永遠のアセリアととらいあんぐるハート3のクロスです。

原作通りには決して進まない、クロスならではの不確定要素を取り込んだ意欲作です。

ヒロインも現時点では皆様の予想を覆す人物になっていると思います。

ご注意ください。この作品は過去掲載分をもって完結（未完結）扱いとさせていただきます。

懐かしむ方がいらつしやるので、掲載する形です。

了承の上ご覧ください。

# 目次

第4話	02話	01話	プロローグ
—	—	—	—
35	24	12	1



## プロローグ

龍は門番の主である。

外界と内界を隔て護るものである。

一人の男は門番に会い、大力を以つて龍を討たんとす。

死に伏す前、龍は男に問うた。

汝が力を望は何ゆえか、と――。

男応えて曰く――

「内患を廃し外患を除き人臣を平らとし、民を富み臣を清とする為である。

即ち田土は肥え、人臣に愁いなく、王は至上であり法が律し徳が治むる。故に番は要らず」

国が纏まつているならば護るものが何故必要なのか。

むしろそれらは人々に恐れられるだけである。

故に平時であれば私は力は必要としない、と男は応えた。

龍は納得し、自らの死を悲しまなかつた。

男は妻となる女王の下、国を富まし良く治め、女王の亡き後三代に渡つて治世を行い、

国が治るを見て後、齢百五十を越えなお若さを保ち、人知れず国を出た、とある。それは一人の少年の、世界を救う物語。

彼を知る物は数少なく、彼を覚えていた者は最早皆無となりながらも。

それでも闘いを止めず、世界の為に己の全てを賭して戦った一つの物語。

記憶は残らずとも。

きつとどこかに記録は残っていると信じて。

運命に抗い、そして。

いつ終わるとも知れず、今を進む——それこそが……。

鹿児島県のとある場所に、日本三大退魔組織が存在する。

——神咲一灯流。

正しくは、「破魔真道剣術 神咲一灯流」と言う。

裏の世界では随分と高名であり、警察を初めとした公的機関に強い権力を持つ組織。

およそ四百年の歴史を持ち、強大な霊を切り伏せる事数知れず。

その情報網は日本各地に広がり、また裏社会の協力者は数知れず。

総員四百二十六名から成る、魔と雌雄を決し闇から光を衛（まも）る組織。

その頂点に立つ一人の少女の名を、神咲薫と言う。

若干十代で当主の座に着いた神童。

広く底の見えない器。

激しい感情と律する知性。

早熟にして未だ完成に至らぬ、先の愉しみな大器。

その少女は今、立派な成人となつて、当主に相応しい風格を備えていた。

——小広間。

多人数ではなく、少人数で話し合いをするために開かれた畳敷きの場所。

上座に座るのは当然の事ながら、神咲薫自身であり、

その対面に座るのは巫女服に身を包んだ、薫以上の風格を備えながらもあどけなさが

残る美少女。

二人は静かに時を過ごしていた。

それは沈黙の時間。歴史の闇に消える対談だった。

茶を呑み、窓から覗く景色を楽しむ。

爽やかな風が頬を撫で髪を揺らす。

葉の擦れ合う音が鼓膜を柔らかく揺らす。

部屋に入つてから已然、二人はまだ、一言も口を開かないでいた。

それだけ事は重大で踏ん切りがつかず、機を待つしかなかった。

重苦しい沈黙の後に、ぼつりと薫が漏らした。

「貴女たちの組織の事は、うちの耳にも入っていましたが……真逆、そんな存在が」

「……はい。何としてでも、倒さなければなりません。協力の対価として私は、あの九尾の安全と、神咲に対する守護を約束しましょう」

「しかし、その対価が、一人の人物の紹介、ですか？ 随分と得過ぎて、裏があるように

思えて仕方がありませんが……ね」

「そうでしょうか？ 世界を救う鍵となる人物と接点を保つ。価値としては十分では？」

「なるほど」

腹の見せ合いよりも先に、組織としての運営が頭を霞めた。

長としての思考。当主としての責任。

了承すべき提案だった。

しかしそれを、神咲薫自身のモラルが決断を先延ばしにしている。

たった一人の犠牲で、多くの人間が救われる。

しかし一人を見捨てるという事は全ての人間を見捨てる事と同義ではないか。

そんな感情が心を占めてしまう。

人の上に立つというのは辛い。大きな責任がある。



神咲薫の顔に苦渋が浮かんだ。

若くして苦悩し続けた眉間は、年齢に比べると余りにも深い皺が刻まれた。

顔繋ぎするべきか、否か。

たつぷりとして時間が経った。

壁一枚隔てた外の空気が冷え込み始め、日が傾き始めるほどに。

そして一言。

やはり吐かれた言葉は、苦渋に溢れていた。

「分かりました。ただし条件どおり、顔合わせまでが私の仕事。了承するかどうかは、本人次第だという事をお忘れなく」

「それは勿論です。まあ、言って納得して貰えない様ならば、こちらも最初から探したりはしないのですが」

女が笑った。底の見えない笑み。

長らく、余りに長らくこういった駆け引きに身を置いてしまった人間の持つ独特な笑み。

苦みばしった顔からは生気と、どこことなく疲労が浮かんでいる。

未来を知り、それ故に時に支配されてしまう巫女。

名を『倉橋時深』と云う。

代わり映えのない学校風景がそこにはあった。

何時も通りの朝、鍛錬と朝食。

晶とレンの喧嘩。

なのはの怒声。

忍の居眠りと俺の居眠り。

教師の怒声。

昼休みの悪戯に、剣道部仲間ととる昼食。

何時も通りの、日常。

代わり映えのない、日常。

そして何時も通りの下校。

隣に立つ者も居らず、ただ独り。

人気の無い一戸建ての並ぶ家々の連なりを、人よりも早い歩調で歩く。

空はまだ青く、帰ってからの鍛錬を何にするか思索する、三年間の習慣。

塀の上で眠る猫の耳が、ぴくぴくとこちらの足音を捉えていた。

生まれついで狩人、獣には敵わないらしい……俺の無音歩法もまだまだだなど自嘲する。

「あの、恭也くん？」

「……………」

……………誰もいない筈だったが……………？

ぼんやりとしていた顔を引き締め、声へと視線を向けた。

気配を感じられない相手。

自分の油断を考慮しても、手練であるのは間違いない無かった。

視線が姿を捉え、射抜き……………ふと緩む。

見知った年上の女性が、そこには立っていた。

神咲一灯流現当主神咲薫その人である。

ゆったりとしたパンツに、ハイネックのシャツ。

大部分の髪を後ろで結び、前に垂らした髪が、剣士の鋭い眼光を和らげていた。

与える印象が随分と違う。髪だけでもこんなにも見掛けが変わるのかと、少し不思議に思えた。

それにメガネをかけていた事もある。

二人して歩き始める。薫さんは俺の横を歩いて、特に目的もないらしく俺の行く道を従って歩いていた。

「視力、悪かったんですか？」

「ダメだよ。視力は両方2.0さ。こうしていると人相が柔らかくなるらしくってね」  
自分と少し似た悩み。

剣の道を生きるには、こうした細々とした心遣いが本来必要なのかもしれない。

学校生活でも少々浮世はずれしている俺も、メガネを掛けるべきか……ふむ、考慮に入れなくては。

やはり黒縁か……。

黒以外はどうしても避けてしまう。

そう考えていると、薫さんが恥ずかしげに顔を伏せた。

人の顔をそう注視するものではない。

「ああ、申し訳ない」

「いや、いいんだ」

「しかしこんな所でお会いするなんて珍しいですね。今日はお仕事、休みですか？」

「今日是用事が有ってね、それで君に会いに来たんだ」

「俺に……？」

神咲の人間が俺に会いに来るといふのはただ事ではない。

退魔と暗殺、護衛を生業としてきた一族には、仕事上ほとんどの接点がないからだ。

「うちの仕事上のお得意さんが、何処から嗅ぎ付けたのか知らないけれど、不破家の跡取

りがいる事を知ったらしくてね、是非にも紹介して欲しいと言う事になったんだ」  
知らず表情が、硬く険しい物へと変わるのを止められなかった。

その変化を見た薫さんの顔もまた、強張りを見せる。

「言いたくなかった」——感情が手に取るように分かる表情だった。

言うなればそれは、薫さんが俺に対して心を許していると言う証だ。

心を許さない相手には、何があろうとも感情を捉えさせないのが裏の世の常。

その分まだ、薫さんは信用に足る人物だと思えた。ただ全幅に信頼するには位が高すぎるが。

一族の長ともなると感情を超えた部分で判断をしなければならぬ事も多々あるはずだ。

今回もその一例だろう。

「で、そのお得意さんとは？」

「日本三大退魔組織の更に暗部にある、『出雲』と言う組織。その長が、恭也君と対面したいと」

「対面したい、ですか」

「ああ。うちが頼まれたのは、恭也君を対面させる事だけじゃ。それは言い変えると、事の当事者からは外されている、と言う事だね」

寂しそうに薫さんが嘲笑した。

己の無力を嘲る笑みだ。

人が良いと思う。そこまで内情をばらす必要は無かった。

神咲家の当主ともなれば、公的機関から圧力を掛ける事だつて容易な筈だ。

これほどの人が結局は断り切れずに、俺に会いに来たのだ。

仕方ない、とそのとき諦めが着いた。

清廉潔白な心情の人の頼みは、断れない。

例えこの決断の先に何があろうとも、怨むのならば己のこの甘さ。

「分かりました。時間はいただけるとは思いますが？」

「うん、向こうには時間があるみたいだから、ゆっくりと準備をしていつて欲しい」

「場所は？」

「うちが家まで迎えに行くよ。向かう先は島根県。出雲大社の奥深く、常人には知りえない地下霊場に行つて貰う事になると思う」

「そこに何が？」

「さあ。うちにも良く分からない。ただ出雲大社には昔から、世界最古の霊剣があると  
言い伝えられているから、霊剣絡みの話かもしれない。うちから言えるのはそれだけ  
だ、申し訳ない」

「いえ、充分です」

——この承諾が、後にこの依頼主に永遠の離別を示唆している物だとは、この時は思いもしなかった。

この時はただ、厄介事へと発展しそうな空気を感じ取り、美由希の教育を美沙斗さんに頼もうと、それだけを考えていた。

端的に言うとその二日後に、俺は世界軸を超えたファンタズマゴリアという世界に転移していた。

## 01話

イオ・ホワイトスピリットがその男に気付いたのは、まさに運命としか言い様がないかった。

大陸西部、ソーン・リム中立自治区とマロリガン共和国の間に位置する、峻厳な山脈の麓に、その男はいた。

日に焼けた褐色の肌に、黒い髪。

全身に刻まれた深い傷痕。

男は岩の上に倒れていた。だが不思議と傷一つない。

イオが麓へと出向いたのは、週に一度は行う食料や雑貨の買い入れの為だった。

もし男が一日でも遅れてその場に倒れていれば、イオは男に気付かず、そのまま飢餓死するか、はたまた狼にでも食い殺されていたかもしれない。

運の良い人だ、とイオは思った。

イオは心優しいスピリットである。美しい外観は人を魅了して止まないが、心には人に対する忌避感が少なからず有った。

それは過去に受けた傷跡が作ったものだ。



だからと言って倒れている人間を放って置くほどの無情ではなかった。向かう先のマロリガン共和国は砂漠の中の町で、携帯していた貴重な水を、イオは仕方なく男に飲ませた。

意識を戻した様子はなかったが、男は水を飲んだ。

小さく呻く。

仕方がない。買出しに行くのを中止して、この人を家に連れて行こう。

イオはそう決めて、運ぶ為の準備に取りかかった。

男の携帯品を詳しく検分して、ふとその異質に気付いた。

両腰に佩いた太刀が二刀。しかもそれはスピリットにしか分からない、独特な永遠神劍の波動を僅かに感じさせた。但し、その波動は弱々しい。身に持つマナ量が足りないのだ。

この人は、エトランジュかも知れない。

エトランジュエ。

遙か昔よりこの世界、ファンタズマゴリアに伝わる異世界の勇者の伝説。

異世界より突如として現れたエトランジュエは、ファンタズマゴリアの精霊たるスピリットを率いて国の憂患を取り除き天下を平らとした。

その力は強壯で、行いは清廉だったと言う。

民の全てがエトランジエを好ましく迎え、世界は一度安寧を知った。遙か昔の話である。

真逆、と思つて首を横に振りながら、イオは青年を背負つた。

スピリットは人よりも力が強い。

多少の重さを感じながらも、それ程には苦痛にならない。

複雑な帰路を歩きながら、イオはある噂を思い出した。

つい最近、かの逸話が真実であつた事が証明されている。

北の果ての辺境国、ラキオス王国にエトランジエが現れた、という噂が、南の果てにまで届いていた。

噂が真実である事を証明するように、ラキオス王国は隣国のバーンライト王国を疾風の速さで併呑してしまつた。

この青年がエトランジエならば、とイオは考え、思考を發展させた。

このような辺境に身を現した理由一体何だと言うのか。

そして自身が見つけた理由は？

これらは偶然か、はたまた必然か。

ただの偶然に片付けるには、あまりにも都合が良すぎた。

青年が目を覚ましたら、事情を聞かなくてはならない。

心に緊張感を抱きながら、イオは住みなれた我が家に着いた。

山奥に作られた天然の洞窟である。

我が家と言うよりは、隠れ家と言った方が相応しかった。

寝ていた（もしくは気絶していた）、と気付いたのは、意識が覚醒して五秒ほどが経つてからだった。

最初に視界に入った物は岩肌の天井であり、周りの壁も大して変わりがなかった。

どこかの洞窟らしい。

恭也は起き上がり、自分の体を確認した。

怪我也傷もなく、持ち物にも変わりはない。

点検が終わってから、辺りに注意を向ける。

転がる試験管や、積み重なった本と紙束の山、山。その山の上にまた本が積み重なり、危うい均衡を作り上げていた。

どこかの研究所らしい、と辺りをつけて、手近な紙を一枚手に取る。

良く分からない文字だった。

メモ書きの様な物なのだろう、汚いし、それ以上に解読しようにも見覚えのない文字の形だった。

漢字やローマ字、象形文字にすら属さない、異文化の文字。

横にはラフスケッチで何かの器具の予想図が描かれている。だがそれが何であるのかは皆目見当がつかない状態だ。

ここが問題のファンタズマゴリアか、と恭也は心中で呟いた。

初めて触れる異文化の空気。初めて見る場所。

それだけに一倍注意を払いながら、人の気配を探る。

それは少し離れた場所に一つ、何の注意も払っていないくらい容易に感じられた。

自身が保護されていた事も考えて、悪い様にされる事はないだろう、と辺りをつける。

恭也は気配へと近付いていった。

洞窟は長い廊下と、空洞とでも呼ぶべき部屋の二種に別れているようだった。

自然が作ったらしい天井と、手を加えられた壁を見れば、大体の想像は出来た。

廊下を通り、気配のある一室に入る。

いたのは一人の女だった。

こちらに気付いた様子はなく、背後を向いたまま、熱心に資料に目を通している。

ざつくばらんな髪。白衣。汚れきった部屋。

ざつと分かるのはその程度だ。

隠居したどこぞの学者か？

恭也の推測は的を射ていた。

後に分かる事だがこの女性、歴史始まって以来の天才ヨーティア・リカリオンである。性格に偏屈があり、また自身の立場の危うさから、若くして隠遁生活を送っていた。

「ん？ ああ、起きたか。調子はどうか？」

「可もなく不可もなくと言った所です。保護して頂いたようで、ありがとうございます」

正面を向いたヨーティアは、童顔で広い額が特徴的だった。

瞳がパツチリと大きく、肌の肌理が細かい。細い眉は意志が強そうに見える。

白衣の間から覗くシャツの胸元には僅かに膨らみがあり、それが女性を示していたが、そう出なければ少年とも取れた。

恭也の答えに対し、ヨーティアは困ったような顔をした。

何故そんな表情になるのか。恭也が疑問に思うと、答えは直ぐに出た。

「んー、言葉が通じないか。困ったね」

「言葉が通じない？」

「あー、こりゃほんとにイオの言う通りエトランジエかな？」

「イオ、エトランジエ……？」

途端、ヨーティアの目が光った。非凡な観察眼が、恭也の発言の意味を的確に捉えた。

「聾啞《ろうあ》って訳じゃないみたいだね。固有名詞に対しては的確に反芻する事が出

来るし、発声器官も発達している。となると文法的な使い方が分かっていないか。もしくは音だけしか捉えていない。それとも意味まで理解しているのか……」

「と言うよりは、俺の言葉だけが伝わっていないのか」

「何かを言ってるみたいだけど……私の言う事が解るかい？」

「ああ」

「解るみたいだね。じゃあ早速だけど私の質問に、〃はい〃か〃いいえ〃で応えて貰うよ。そうすれば少なくとも、私たちは意思疎通が出来るわけだからな？」

なるほど、多くの言葉を必要とせず、確かな情報を得るにはこの方法が一番だ。

恭也は感心しながらも、自分の名前。

自身がエトランジエ（異邦人）である事を自覚している事、また自身に武力がある事を応えていった。

時を一日遡る。

出雲大社である。

八百万の神々が集う場所であり、出雲とは八岐大蛇がかつて居たと云われる場所でもある。

その八岐大蛇が減んだとき、尾から剣が現れ、それを草薙と云う。

またの名を天叢雲劍（あめのむらくものつるぎ）と呼ぶ。

三種の神器の一つであり、こちらの方が高名かもしれない。

ファンタズマゴリアで出てきた永遠神劍の名の一つに、草薙と云う名が列記されている。

草薙は意志を持つ永遠神劍であり、自らの所有者を求め彷徨っている。

そして同時、何時所有者が居ても良いように、自らが組織を作った。

名を『出雲』と云う。

草薙は公式では現在、熱田神宮で保管されている。

しかしその姿を見た物はいない。

また天皇が即位する宮中儀式に使われるのは、伊勢神宮から献上される須賀利御太刀であるので、これもまた叢雲ではない。

するとその姿は何処に在るのか。

その真実を、恭也は秘境の地で見るとなった。

地下の一室である。

空気は清涼でやや冷たく、肌に心地良い緊張感を持たせる。

部屋には恭也と倉橋時深がいた。

此処まで連れて来た薫は部屋に入る事は許されず、別の部屋で待機していた。

「はじめまして、不破恭也さん」

「……はじめまして」

「倉橋時深と申します。この剣の意思に従って貴方をお呼び出したのも、私によるものです」

「剣の意思に……」

「日本は古来全ての物に神が宿ると考えた国です。神剣もまたその一つ。ましてや日本最古の草薙に意思が宿るのに、おかしな事がありましたでしょうか？」

美しい少女だった。

赤袴を穿いた時深は、妖艶に笑った。

外見からは想像も出来ない淫靡さだった。

幼いのに成熟している。相対する矛盾を併せ呑んだ美が、恭也の前にある。

「そしてこれは、私の意思でもあります。恭也さん、是非とも貴方には私達の陣営に入つて頂きたいのです」

時深は深々と頭を下げた。

が、その言葉だけで納得できるものではない。

情報が余りにも断片的過ぎる。

「待つてください。話が飛躍し過ぎている。陣営だとか、何故俺が選ばれ、どういう組織



に、どういう理由で入るべきなのか全てを説明して貰いたい。第一貴女方は話が一方的過ぎる」

「そうですね。申し訳ありません。何百年と待つていたのです。此処に着て焦燥に走るのは下策というものでした」

倉橋時深は語る。

永遠神剣と言う存在と、世界の理法を。

宇宙はマナで構成されており、そのマナを集めるためにロウエターナルが世界を蹂躪し、平和を奪い人々を戮しているのだと。

ロウエターナルから世界を護ろうとする側をカオスエターナルと言い、その内の一人が倉橋時深自身であると。

またこの国に存在する草薙は、エターナルが所持する永遠神剣の一つであるが、現在所持者が居らず、自らの意思で第三勢力を作っている。

そして更に。

恭也の持つ小太刀の一つは、マナ構成が薄いこの地球において非常に珍しい、永遠神剣であると。

「貴方の持つ永遠神剣の名を『不動』と言います」

「不動……」

恭也は反芻した。

永全不動八門……その呼び名は、恭也が幾度となく心で繰り返した言葉だ。なるほど。それなら確かに自分が呼ばれるのも、道理に適う。

「貴女の神剣はしかし、四位であり、下位に当たります。またその力はこの世界では開花していない。だから貴方にはまず他の世界へと赴き、ロウエターナルを駆逐していつて欲しいのです」

報酬は支払います、倉橋時深はそう言った。

貴方たち一家に今後降りかかる全ての災厄を退けるといふ確約である。

「そんな事をどうやって信じれば……」

「私の目は未来を見通します。故に時深。言い換えれば時深のみは視となります」

倉橋の言葉に誠意を感じ取った恭也は、提案を了承した。

いきなり世界だ宇宙だとしてつもない規模での話が行われたが、やる事は変わらな  
い。

武を以つて正義を護る。

不破家を代々と受け継がれていた小太刀には、そんな秘密が籠められていた。

その事を知ったからこそ、恭也は了承したのであり、そうでなければ彼はこの壮大な計画に乗る事もなく、自らの一生を別の形で終えていたに違いない。

世界を渡る時、確実に味方となりえる者へ会えるように手引きすると、時深は言った。

## 02話

——聖ヨト曆330年、ソネスの月、青一つの日。

恭也の生活は激変した。

まず彼はファンタズマゴリアを知る所から始めなければならなかった。

永遠神剣『不動』は僅かに中空に漂うマナを吸収しているが、未だ眠りにしているのかと思えるほど、その波動は緩やかだった。

言語の習得は、当初想像しているほど難しくはなかった。

何しろ聴き取る事が可能だったのだ。

たどたどしい発音ながらも、会話は成立し、いつしか普通に話せるようになった。

それも恐らくは、『不動』の能力があるのだろう。

また恭也自身に読心術の心得があつた事も大きかった。

とは言え、比較的早かつたと言っても、その間には二ヶ月が経過している。

言葉を覚え、ヨーティアの雑用をこなし、日々の鍛錬を続ける恭也は多忙を極めた。

この日も恭也は比較的近隣に存在するニーハスの村に食料を買いに出掛ける最中だった。

峻険な山であり、村へと続く道は近いながらも、マロリガンに比べて険路が続く。傾斜が強く、また足元は凹凸に富んだ。

スピリットとしては殆どの力を持たないイオでは通れない道だった。

枯れ枝や落ち葉が積み重なる土を噛み締め、恭也は跳躍する。

その姿は軽々としており、空中を飛ぶかの如くと言った様相だった。

そしてこれらの運動は永遠神剣を介さず、恭也の生身で行われたものだった。

傾斜が強い。だから滞空時間は長くなる。

恭也はその特性を利用して、跳躍を繰り返した。

自由落下を利用するから自然と速度がつく。

二時間ほどでヨーハスの村へと辿り着いた。

そこでヨーティアの発明で得た小さなエーテル結晶を対価にして、野菜を中心に買い

込み、帰路へと着く。

帰りは道の途中で仕掛けた罠を確かめ、動物が捕れていたらそれを獲物にする。

子であつたらそれを放す。

また辺りの木々を倒し、乾燥させて薪の蓄えとした。

ヨーティアが山伏のようだ、と笑ったのも無理のない事かもしれない。

これらは恭也が幼少時代サバイバル技術として身に刻まれた生存技術だった。

飽食の時代に役立つ事は無かったが、真逆こんな場面で日の目を見るとは、と思うと恭也も苦笑するほか無い。

洞窟の前ではイオが水汲みを終えて返ってきた所だった。

「お帰りなさい。今日はまた、昨日よりも早かったのですね」

「ああ。村の人間もようやく慣れてきてくれたみたいだな。交換にも時間が掛からなくなってきた。悪い、ちよつとこの鳥持つてくれないか？」

「はい、今日は獲物が掛かったのですね」

イオ・ホワイトスピリットは憂の人だった。

常に憂いを目に宿し、血を嫌う。

物腰は穏やかで、知識が豊富であり、また良識に溢れているためヨーティアの補佐としては正に打ってつけの人材だった。

そのイオは今、僅かにだが微笑んでいる。

その僅かな変化が嬉しい。

このような感情の機微を感じ取るようになるまで時間が掛かった。

あるいはそれは、言葉を憶える事よりも難しかったかもしれない。

またイオも、恭也に対し気を許し始めたという事に意がある事も確かだった。

恭也はヨーティアよりもむしろ、イオに注意を払われていた。

五人目のエトランジエ。

それは聖ヨト伝説の伝承には無く、想定外の来訪であったからだった。

イオは鳥を持つと、洞窟の中へと入っていった。

水瓶は一杯に入っており、重さならば三十キロは下らない。

それを片手に持ち平然と歩くのだから、恭也としては脱帽するほか無かった。

これでスピリットとしては最弱に近いと言うのなら、俺など一体何の役に立つのか。

頭が痛くなるような現実だった。

今持っている野菜は一週間分で三十キロほど。一つの麻の袋に入れているから重さは大した事はないが、だからと言ってあかも容易く持てる重量ではない事も、また確かだった。

溜息を吐く。のろのろとイオの後をついて、恭也は歩いた。

ホワイトスピリットは特異なスピリットだった。

ブルー、レッド、グリーン、ブラックの他の四色のスピリット立ちに比べその数が少ない事も一つであるし、また各属性を兼ね揃えている事実も、注目しなければならない。

他のスピリットが基本的に戦等を目的とされているのに比べ、ホワイトスピリットだけは、むしろ橋渡しのような役目を持っている。

その中でもやはり、イオ・ホワイトスピリットは特殊な部類に入るだろう。彼女は他のスピリットに比べいつも消沈したような面差しを持つものの、意志は強壯であり、思考は柔軟さと深みを兼ねていた。

ある時イオは、恭也のエトランジェとしての特異性に気が付いた。

即ち、彼が未だに神剣と言葉を交わしていない、と言う事である。

スピリットにしろ、より高位な存在であるエトランジェにしても、神剣とは相棒であり、同時に心許せない武器でもある。

永遠神剣は意志を持ち、時に協力し、時に所有者を操り喰らいながら力を振るう。

沈黙を好む者もいれば多弁な者もいるが、しかし彼らは一概に所有者と言葉を交わす。

無言の永遠神剣と言う存在を、イオは信じられなかった。

場所は隠れ家の最奥、研究室である。

本棚にずらりと並ぶ書物。使用前の研究器具。唯一物で溢れているのは、部屋の主、ヨーテアの事務机だけだ。

最近恭也が買出しに出る事が多い為、部屋は整頓されていた。

買出しで使われていた労力はイオの物だから、ヨーテアに整頓能力の無さが浮き彫りになったのだが、本人は何処吹く風。今も椅子に行儀悪く凭れながら、イオの考えを



聞いていた。

「ふうむ、なるほどな。そりゃあ確かに私の知ってる知識とも違う」

神剣が使えないエトランジェ。こりゃ問題だね。

ヨーティアもまた即答できる答えが見つからず、初めて知る事実に困惑したように頭を掻いた。

困ったとき、頭を掻きながら思考を展開させていく癖。

いつでも自信満々のヨーティアには似合わないのだが、言っても直らない習性のもだった。

今ではイオも、微笑ましく思うに過ぎない。

この偉大な科学者もまた、一人の人間には違いなかった。

「で、当事者の恭也には聞いてみたのかい？」

「いえ、まずはヨーティア様に覚えが無いからお聞きしておこうと思ひまして」

「私よりもスピリットのイオの方が詳しいだろうに……」

「文献の力という物もありますので」

「なるほどね。まあ良いさ。じゃあとりあえず持ち主に聞くとしよう」

おーい恭也ー。

ヨーティアが叫んで間もなくして、気配を感じさせず恭也が研究室へとやってきた。

それどころか平然と、イオの背後に近付いている。

一体何時の間に？

イオの内心は、愕然とした。隠居しながらも世界最高峰の技術を持つヨーティアには、勧誘や暗殺の手が多い。それらの危険から護るべく、イオはある程度の武術を修めていた。それらは倒す手段ではなく、護るのが主だ。故に気配の探知には重きを置いている。

しかし恭也に大しては、微塵たりとも気配を知る事が出来なかった。

このエトランジエは、恐るべき武の能力がある。

恭也の深遠な才能に気付くと同時に、敵として出会わなかった巡り合わせに、イオは天に感謝した。

「おう恭也、お疲れさん。今日も狩りは巧く行ったみたいだね」

「ああ……」

「でだな、ちよーつとばかり聞きたい事があるんだけど、お前さん自分の永遠神剣の声は聞けるのかい？」

「いや……そう言う事は無いな」

「うーん、そつか。じゃあ否が応でも聴いとく必要があるな……。多分まだ眠ってるんだらうけど、イオに起こして貰う」

「起す？」

疑問を投げかけた恭也に、イオが代わって答えた。

イオの持つ永遠神剣、能力は特殊である事。

このような事に使う事になるなんて。そんな思いが湧き上がる。

イオの視線の先には永遠神剣第四位『理想』がある。

最近では火を起こしたり、水を浄化したりする事にしか使われなかった、便利な代物。本来の能力の大半を使ってやれない事を詫びながらも、それを善しとしていた。

理想と、不動の刃先を重ね合わせる。

緩やかに滲み出すマナを介して、相手の精神領域の奥深くへと潜り込む。

恭也の精神構造は深く、広大だった。

——これは、凄い。

思わず息を呑む。

そこは鋼鉄の柱で出来ていた。それらの周りに夥しい鉄筋が真直ぐに走り、四方へと伸びている。中心は灼熱の太陽のように赤く燃え滾り、周りは雹を思わせるように冷え切っていた。

彼の知性と、心根と。精神世界はその人間の性格を直接表す。

凡人ならばこうは行かないだろう。精神の歪みが中心を歪め、温もりに欠け、広さに

欠ける。

器の広い狭い、深い浅いは、精神世界にも同じ事が言えた。

恭也のそこは、冷たさと温かさが同居する、紛れもなく英傑の精神世界だと、イオは思った。

そして中央。

熱された鋼鉄の柱の傍に、一つの小太刀があつた。

あれだ、と思つた。

イオの意識は精神の中を真直ぐに進み、永遠神劍『不動』へと辿り着いた。

「これ……は……？」

いぶかしむ。

永遠神劍の鞘と柄には、明らかに何者かが縛り、鞘から放たれない様にされていた。

ここは恭也の精神世界であるから、恭也が劍を抜く事を疎んじているのか。

最初はそう推測したが、それだと新たな矛盾点が出てくる。

鋼鉄を主とする精神構造と、イオが体感した恭也の武術の実力は、力を否定していない。

むしろ肯定していると言える。

ならばこれは、自分と同じ様に精神世界に入り込める人間の手によるものかも知れない。

い……。

イオの少々飛躍した思考は、しかし真実を得ていた。

イオの手は鞘へと伸び、神剣を固定している物体へと目を向けた。

マナ独特の感覚が、ぞわぞわと感じられた。高濃度マナの固形物、と辺りをつける。

イオは永遠神剣『理想』抜き放つと、そのままマナ固形物へと叩きつけた。

鈍い金属音が反響して、その後、強烈なマナの波動を感じた。

迸るマナに吹き飛ばされる様にして、イオは恭也の精神世界から弾かれた。

精神世界から現実世界へと、突如として移動したイオは、平衡感覚を失っていた。

また五感が鈍くなり、自分の置かれている状態を直ぐに察知する事が出来ないでいた。

呆然と暫くしていると、やがて意識がはつきりとし、回りに注意を向けられるようになった。

そしてやっと、恭也の変化を感じ取った。

これが真のエトランジェの力……。

イオは直ぐ隣で感じられる力強さに、身震いしそうになった。びしびしと吹き付けてくるようなマナの旋風が身を覆っている。存在感がはつきりと増して、足が地に着いた、と言うような安定感を思わせた。風貌は何一つ変わっていないけれど、身を包む風

格が、恭也に出来たと言って良い。

「これが、『不動』……はじめまして、だな」

恭也が永遠神剣に向けて、微笑を浮かべながら語りかけた。

それは後世、永遠に名を刻む高町恭也と言う存在の、第一歩だった。

## 第4話

【恭也よ……】

永遠神劍不動の声は落ち着いた響きを持つている。初老の男の声であり、深みと深みがある。またその奥には打てば響くという軽快さも、また隠し持つている様に、恭也には聞こえた。

（なんだ？）

【私はまだ、貴方に力を見せていない。また、たびたび見せる事も無いだろう。私を使う事は、多量のマナを消費する。それは結果として所有者を苦しめる。本当に必要な時以外は、私を抜かぬ事だ】

（一理ある……しかし使うかどうかは俺が決めよう）

淡々とした、しかし物言いを許さぬお互いの言葉に、『不動』と恭也は互いに沈黙した。腰に佩いた八景（不動）は実は夫婦剣ではない。父士郎が国内を遊び歩いていた時に、刀剣屋から買い入れたものだ。後士郎が死んで家に届けられたのは、片側の右用のみであった。それだけに恭也の永遠神劍は片手しかなく、両刀を使うのは難しい。

これは後々の戦闘に支障が出るな。と恭也は深刻な悩みとして受け止めた。

隠れ家からほど近い、森の中である。

木の幹は太く、抱えきれないほどに育った木がそこかしこに見受けられる。

下生えの木や草は実や花をつけるのが多い。

自然と生物は多種多様であり、また大型動物も好んで生息している。

最初土地感覚が分からなかった恭也は、この森に立ち寄る事を禁じられた。それだけ危険に満ち溢れていると言う事だった。

それは同時に、一度で得られる獲物や食料が多いと言う事でもある。

永遠神剣が開放されたのを理由に、初めて恭也はこの森へと訪れた。

なるほど、天まで突き伸びた木は空を覆い隠し、ほぼ一定の間隔で生い茂る為に、方向感覚を喪失してしまう。また絶えず聞こえてくる野生の生物の鳴き声や、時に獣の悲鳴は、平常心を削り取るだろう。

が、恭也に取っては何ほどの事でもなかった。

元々恭也は幼少時を自然と暮らしてきた。

天と地と父である人を師として来た。天地人、この三つが兼ね揃えば、分からぬ事はない、と太古の人間は言っている。

その境遇が、恭也には揃っていた。

今の恭也の感覚は剃刀の様に鋭く、錐の様に尖っていた。しかし気配はあくまで穏や



かであり、草食動物でさえ不安を持たず近寄れるほどに、心身が落ち着いていた。

ゆつくりと森の中を闊歩していく。そこには獣を捕らえるという気負いは何処にも無かった。むしろこの動作は、獣が近付かなければ良い、と危惧している様でも有った。

恭也が進むうちに、森は途切れ、小さな広場に辿り着いた。

中央には泉があり、澄んだ水が滾滾と湧き上がっている。

日の光が水面で乱射して辺りを美しくライトアップしていた。

そして泉の横には、身の丈の優に三倍を越す大岩があつた。

遙かな歲月を雨風に打たれていたのだろう。大岩は非常に丸く、その表面は細かく磨かれていた。

それは最早忘れ去られた事実ではあつたが、聖ヨト暦の元年、ヨト国を建国した内の一人、第三王子が地の神を慰撫する為に築いた霊石だった。

恭也がそんな事を知る由も無いが、ただ導かれるように岩の頂へと目を上げ、口が叫ぶように開いた。——だがそこまでで、声は出ない。むしろ出さなかつた。

岩の頂には、リュと呼ばれる一角獣がいた。ファンタズマゴリアでもめつたにお目に掛かれない、多くのマナで構成された幻獣である。恭也の世界での、ユニコーンがこれに似ている。

神々しい空気を身に纏つたリュは、恭也に気付く事もなく暢気に天を見ていた。青空

の中間々と千切れ雲が浮かんでいる。明日の晴れを予感させる綺麗な青空だった。

リユはファンタズマゴリアでは信仰的であり、見た物に幸運を授ける神の遣いときれていた。だがそんな事を露知らぬ恭也は、肉付きの良い体格を見て、

(今夜の夕食は、ステーキか、はたまたシチューか)

などとぼんやりと考えていた。

恭也は身構えなかった。だからリユも、恭也の存在に気付いた後も警戒しなかった。

丸く黒く、どこまでも優しい瞳が、恭也を見つめていた。

その真意は恭也には分からない。

だがその瞳を見て、リユを狩る事を止めた。

視線に負けた、とも言える。

リユという幻獣から漂う香気に、恭也は惚れた。

良い生き物だな、と素直に感心し、殺すには忍びないと思つた。

しばし見詰め合う時間があった。

そしてリユが動いた。

ぴくりと背後へと一度目を向けると、驚くべき俊敏さで恭也へと駆け寄る。

恭也は剣を抜いた。

駆け下りたりユと立ち変わるようにして、黒い獣毛に覆われた大きな獣が、岩に立つ

た。

狼の一種のようだった。目が血走り、涎を垂らしている姿は非常に飢えを感じさせた。

ファロと言う名の獣だった。

リユは恭也の背後へと周り、身の安全を確保した。

恭也はリユを護るべく剣を構え、獣へと切っ先を向けた。

それは、先ほどまで命のやり取りにまで発展しかけたものが持つ関係ではなかった。

一瞬にして強固な信頼関係が、生物として二人に出来上がっていたのかもしれない。

恭也は永遠神剣を、平行にし、身を束ねる様にしてファロへ向けた。

【そう、それで良い】

静かな血の沸くような興奮を感じさせる不動の声だった。

永遠神剣がキィー、と甲高い金属の振動音を自ら立てた。切っ先が僅かに七色に輝いている。

永遠神剣は独自の属性を持っている、意志を持った剣だった。属性は名を冠している。例えば、後に恭也が加わる国のスピリットが持つ永遠神剣で、『赤光』といものがあ

る。その名から察することが出来るように、この永遠神剣は炎の属性を持っている。

そして、恭也の持つ神劍の名は『不動』であり、それも属性を表している。

永遠神劍とはまた、使用者の持つマナを加工し、増幅する道具でもある。元来使用者——術者は、永遠神劍を介さずとも、異能を遣う事が可能だった。ただその程度には、一と百の開きがある。

恭也はこれらの説明を、他ならぬ『不動』自身から受けた。

ファロは獐猛な笑みを浮かべ、恭也を見据えた。その瞳は恭也もリュも、等しい獲物として捉えていた。

ファロが距離を詰めた。

恭也は動かなかった。

ファロが構え、張り詰めた弓のように身を引き絞つても、恭也は顔色一つ変えず、そのまま劍をファロに一直線に向けていた。

飛び放たれた矢の如く、ファロが距離を詰めた。粉塵が舞い、辺りに腐葉土が舞い、両者の間にはもうもうと砂が立ちこめた。

大きな牙がぎらつき、恭也目掛けて振り下ろされた。涎が散る。

リュが恐怖したように一瞬身を竦ませる。それほどに苛烈な一咬みだった。

だがそれ以上にリュが恐怖したのは、恭也の一撃だった。ただ真つ直ぐに、ただ直に。

一切の無駄が生じない直突きが、一閃の光となって放たれた。永遠神剣はファロの頭を貫いた。

そのまま引かれた切り口は、重なり、最早どこが貫かれたのかも判らなかつた。動作に似合わぬ鈍重さで、ファロは地に倒れた。

どくどくと血が流れる。

【お見事】

多分に感動を含んだ声で、『不動』が賞賛の声を上げた。

ファンタズマゴリア以来、恭也は鍛錬以外、一度も剣を振るつていなかった。

『不動』にしてみても、使用者の実力には不安があつたのだろう。

これでは文句の付け所が無いと、不動は心から安心し、またこの相棒を心頼もしく感じた。

ファロより流れた血が気化し、更にマナ化して空気に溶けて行く。

また貫かれた部分から少しずつ、その実態が朧になりつつあつた。

「これは、なんだ……う？」

「こやつもまた、狂える幻獣だったという事であろう。マナより生まれし全ての物は、死してまたマナへと還り行く。その性質が多くのマナで出来ている物は、それだけ早くマナに還る」

「なに……となると俺は何のためにこんな手間を掛けたと言うんだ！」

「がおー、と恭也が吼えた。」

恭也の目的は狩猟であり、今夕の食事の糧だ。その食肉となるべきファロが消えてしまつては、全ては無駄手間という事になる。

恭也は慌てて一握りの肉を得ようと、ファロへと近寄つた。が、その手をすり抜けるように、ファロは肉体の全てをマナへと還した。

自分を殺した相手に対する、最後の抵抗と言えなくも無い。

「くそっ！」

「なに、あやつから喰らつたマナのお蔭で、私の腹は膨れた。問題無かろうて」

永遠神剣『不動』が一人、愉しそうに笑っていた。

「なるほど。では今夜は野菜炒めですね」

「申し訳ない」

「いいえ、恭也様がいらつしやるまで、肉にありつけた事はまずありませんでしたから」  
イオが朗らかに言った。

目は手元へと向かい、そこでは野菜が切られている。

イオが『理想』を握ると、切っ先から火がでた。火は薪に燃え移り炎になった。

随分と庶民的な魔法だ。

魔法と聞くと大きな事に思えるが、その始まりは結局こう言った細々とした事から始まったのではないか、と恭也は思った。

イオは釜を置き、野菜を炒める。

一連の動作は優雅であり、イオの腕を知らしめるものだった。

恭也は不思議と腕の良い料理人との縁があるな、とその幸運に感謝した。

もしかしたらその幸運の分だけ、美由希が料理下手になるのかも知れない、とさえ考えた。

そうだとすると、あまりにも愚妹が憐れだ。

恭也が『理想』に目を向けていた為か、イオは恭也の神剣『不動』を話題にした。

「恭也様の永遠神剣は燃費に優れていますね。またマナを多く求めない、おとなしい性格のようです」

「そうみたいだな。俺にも無駄な多用は避けろ、といつも口うるさく言っている」  
【……………】

恭也の腰元から、当然である、というような剣気を感じた。

イオは苦笑しながら、しかし恭也の意に反して、不動の肩を持つような発言をする。

「でもこの世界にある上位の永遠神剣は皆、互いに仲が悪く、いつか相手の神剣を吸収してやろう、と思っっているらしいのです。また使用者に多量のマナを要求する神剣も多い

と聞きます。それにより自我を失う者さえいるとか……。恭也様は良い神劍と巡り合いました」

イオの目元には優しさがある。多くの不幸を乗り越えてきた者だけが持つ、静かで力強い優しさだった。

その目を見ると、恭也は優しい気分になる。不動への不満も、まあ良いか、という気持ちになる。

それはイオがもたらす、大いなる包み込むような優しさだ。

恭也は今、独りだった。家族と次に会える日が来るのは、何時の事か分からない。来年かも知れず、もしかしたら二度と会えないかもしれない。

ふと胸に寂寥感が湧く時、イオの目を思い出す事に気付いて、惹かれていた事を知った。

それはイオも同じだったのかも知れない。

スピリットと言うだけで、家畜のような扱いを受ける事が多かった。

スピリットは人ではなく、人権は無く、また戦争の道具として常に最前線で戦う宿命を持っていた。

多くの人間から受ける視線に底冷えする冷たさが無かったのは、ヨーテアを除いて、恭也が初めてだった。それはイオが知る、始めての異性。スピリットは子を成さず、



人で無いが故に、愛欲の対象にはならなかった。

また恭也の性格は朴訥でありながらも時に鋭く、人の心の闇を良く知っていた。

恭也の過酷な過去を髣髴とさせるような、ふと浮かぶ寂しい表情が、イオの胸を穿つた。

急に静かになった。二人の視線が交わる。

少しだけ、二人は見詰め合った。互いの瞳が濡れたように輝いている。

だが、それも長くは続かない。

「野菜焦げちやいますよ」

「そうでした。ヨーティア様に何て怒られるか」

恥ずかしそうにイオが微笑した。

まだ目の奥に憂いの残る笑みだ。

恭也の胸が締め付けられた。

結局、イオと恭也はその後、何事も無いかのように三人で食卓を囲んだ。

事実、時が経つと先ほどの情感は嘘の様に静まっていた。

時の悪戯だろう、と恭也は思う。

時は人を誑かす。

人は一瞬の判断の過ちで、一生を台無しにする事がある。

そう早く決める事は無い、と恭也は思った。

料理は美味かった。少し焦げている事と、肉が無い事を除けば良い夕食だった。食事が済むとその後はお茶になった。

ヨーティアと恭也が残り、イオは後片付けの為に厨房へと退いた。

恭也も手伝おうとしたのだが、ヨーティアが止めた。

話したい事があるのだと言う。

二人は暫くゆつくりと、黙ってお茶を飲んでいた。

茶の味は鮮麗で香があり、ヨーティアが好む物だ。何でも眠気を散らす効果に優れるらしい。

これなら肉にも合っただろう、と思うと、恭也はますますあのファロが憎々しかった。「あの獣め……」

悔しげに恭也が呟くのを、ヨーティアが見逃さなかった。

そして事情を聞き、大きな声で笑う。

「そうかそうか。だが良い事をしたよ。リュは聖獣だ。リュを見た者は成功するし、狂った獣、ファロを殺した者もまた成功すると言い伝えられている。もしかしたら恭也、お前は大臣かたまたまた富豪にすらなれるかもしれないな」

「真逆」

恭也は一笑する。自分には金欲が無ければ、権力欲も無い。

過ぎた望みが身を滅ぼす事を、恭也は過去の体験から良く知っていた。

「しかし恭也は剣術が冴えるらしい」

「それしか取り柄がないですからね」

「そう謙遜するな。聞きたい事というのは、お前が元いた世界の事だ。どのような学問があつたのか、どんな文化があり、特徴があつたのか、是非教えてもらいたい」

尊大な態度を崩さないヨーティアが、頭を下げた。

驚くべき自体に恭也は困惑した。

ヨーティアに教えられるほどの知識が、高校の授業もまともに聞いていなかった恭也には無かつたからだ。

この後に起こるだろう罵声の声を想像して、恭也の顔から血の気が引いた。

何とか良い言い逃れの方法は無いか、と思つたが、ヨーティアほど自尊心の強い人間が頭を下げているのだ。先延ばしにする事や無かつた事にするなど不可能だろう。

恭也の前頭葉は驚くべき速さで回転を始め、自身にとっては初めてとも言えるほど考えに考えた。

そして閃く物が見つかった。

自身にとって学問、として学んだ物が、一つだけあつたのだ。

兵法である。兵とは古来の中国において戦を表している。

恭也は剣術を修める関係上、兵法に付いても一通りの勉強をしていた。

兵法は集団での行動時だけではなく、個人の場合にも役立つのを昔、父の士郎が言っていたからだ。

孫子を読んだ。『呉子』『司馬法』『尉繚子』『李衛公問对』『黄石公三略』『六韜』という兵法七書を恭也は貪欲に読んだ。読んだだけでなく物にした。そうする必要が恭也にはあつたからだ。

力を望んだ。未熟である己を恥じ、日本でも有数の実力者になつた今もまだ、武を欲している。

そこには御神、不破という暗殺と護衛を生業とした自家一族の滅亡があり、父の無残な死が根底にある。

一家の柱となる父を失つた事によって、その時父士郎を中心とし、新たな生活を始めていた一家は、崩壊しようとしていた。

それを止めるには、恭也はあまりに幼かつた。

しかし恭也は自身に力が無かつたからだ、と思つた。

憧れと目標である父が、世界で十本の指に入るほどの達人であつたのも、原因かもしれない。

既に兵法と鍛錬法に関する知識は深奥にまで達している。

だが恭也は最初、日本の文化について語る事にした。

新聞やニュースを読んでいれば、自然と歴史は頭に入る。

それ等を意識すれば、科学の分野にも知識が増える。

一家の長男として、ある程度権威を持つとうと始めた情報の取入れを、恭也はこの時、初めて有り難さを知った。そして知識が如何に大切かという事を、文字通り身に刻む思いで知った。

後年の恭也は文武に明るい傑人となるが、その始まりは、実はこの一人の天才から発された強烈な質問だった事を知る者は、いない。

いるとすればそれはイオ・ホワイトスピリットただ一人である。